

第2章 家庭教育支援者の養成研修修了者の地域での活動状況調査（質問紙調査）

1 調査方法等

（1）調査概要

栃木県総合教育センター生涯学習部では、家庭教育支援者の養成研修（以降「養成研修」と記載）として、平成26年度から家庭教育支援プログラム指導者研修*1を、また昭和62年度からは家庭教育オピニオンリーダー研修を行っている。

家庭教育支援プログラム指導者研修は、教育委員会事務局生涯学習課が平成17年度に作成した「親学習プログラム」及び、その補完に向けて作成した「親学習プログラムアレンジ版（平成20年度）」、「思春期版家庭教育支援プログラム（平成23年度）」の総称である『家庭教育支援プログラム』を実践するための知識・技術などを身に付ける目的で実施されている。また、家庭教育オピニオンリーダー研修は、地域における家庭教育の方策を考えたり、「家庭教育オピニオンリーダー」の活動について学んだりすることを通して、地域に根ざした家庭教育の支援に必要な知識・技能を身に付ける目的で実施されている。

今回の調査の対象は上記2つの研修の修了者だが、調査の目的の1つが「研修プログラムの見直しと改善」であり、近年の社会状況や受講者のニーズ等を踏まえて行う必要があることから、直近4年間の修了者に限定することとした。

（2）調査内容

質問紙調査では、「養成研修修了後の状況」、「養成研修内容の活用状況」、「基本属性」の大きく3点について調査した。（資料「質問紙調査の内容」）に、これらの詳細を示す。

（3）調査方法

ア 調査票の配布・回収・集計

直近4年間の養成研修修了者を対象として調査票を配布し、回答を得た。

対象者	対象者数	回答数	回答率（%）
養成研修修了者（H30～R3）	159	96	60.4

イ 聞き取り調査の実施

回答者の中から、修了者や団体等の活動活性化や、養成研修の見直しに向けたヒントとなりそうな取組を実践する方5名をピックアップし、聞き取り調査を行った。（資料「聞き取り調査の内容」）に、その主な内容を示す。

（4）調査期間

質問紙調査：令和4年9月～10月

聞き取り調査：令和4年10月～12月

*1 平成22年度から平成25年度までは「親学習プログラム指導者研修」の名称で実施された。また、平成26年度から平成29年度はプログラムの種類ごとのコース別に実施された。

(資料「質問紙調査の内容」)

調査項目 (大分類)	調査項目 (小分類)	
養成研修修了後の状況	活動への興味関心	高まった・変化なし・低下した
	活動への参加意欲	高まった・変化なし・低下した
	活動への参加	活動している・活動していない
	参加の理由	自由記述
	参加している活動	概要や特徴・参加団体名 (複数回答可)
	参加活動への満足度	満足・どちらでもない・不満
	満足度評価の理由	自由記述
	参加しない理由	自由記述
	今後参加したい活動	内容や特徴・参加団体名 (複数回答可)
養成研修内容の活用状況	活用の有無	活用している・活用していない
	活用している (した) 研修内容	※主な養成研修内容を表示し選択 例：家庭教育力 ^o オンライン ^o 研修
	特に役立った研修内容	自由記述
	活用場面	自由記述
	もっとよく身に付けた かった知識・技能等	自由記述
基本属性	性	男・女・その他 (自由回答)
	年齢	令和4年4月1日現在 (自由回答)
	職業	自営業・自由業・管理職・事務職・労務職・ 学生・無職
	居住地域	市町村名まで
	居住年数	令和4年4月1日現在 (自由回答)
	家族構成	配偶者・父母・祖父母・子・孫・兄弟姉妹・ その他

(資料「聞き取り調査の内容」)

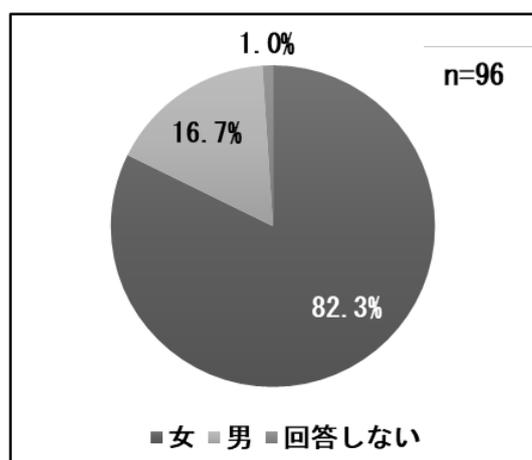
<p>○自身が取り組む家庭教育支援に関する活動の実態について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・始めたきっかけ ・ねらい/目的/意図 ・想定した地域のニーズ/課題 ・実施に至るまでの過程 (行政や地域の家庭教育支援団体とのかかわり、苦労した点等) ・活動の成果と課題 <p>○研修での学びと、活動との結びつきについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修受講のきっかけ ・どの研修内容が、活動のどの部分で、どのように、どの程度役立ったか <p>○今後の活動の見通しについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在の活動の改善策 ・新たに展開しようとしている活動 <p>○今後活動を考えている方へのアドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既存の活動に参加する際に ・新たな活動を試みようとする際に <p>○その他</p>
--

(5) 集計の表現

回答率 (各回答の百分率比) は小数第2位を四捨五入した。単数回答の百分率の合計は100%であるが、四捨五入のために合計が見かけ上100%にならないことがある。

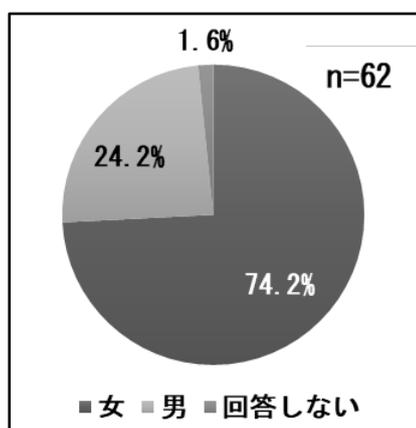
2 回答者の概要

(1) 性別

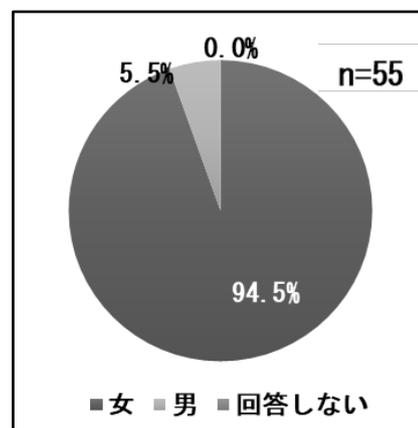


【図1-1】性別（全体）

女性からの回答が80%を超えている。



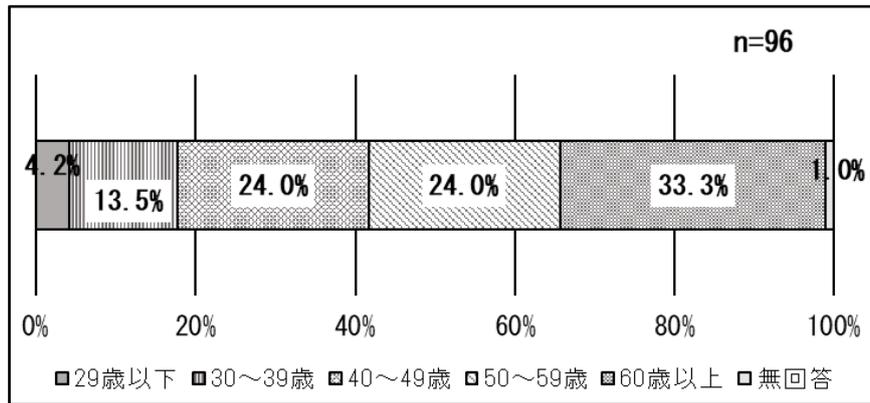
【図1-2】性別（家庭教育支援プログラム指導者研修）



【図1-3】性別（家庭教育ピアコンネクター研修）

研修別で見ると、男性の多くは家庭教育支援プログラム指導者研修を修了している。

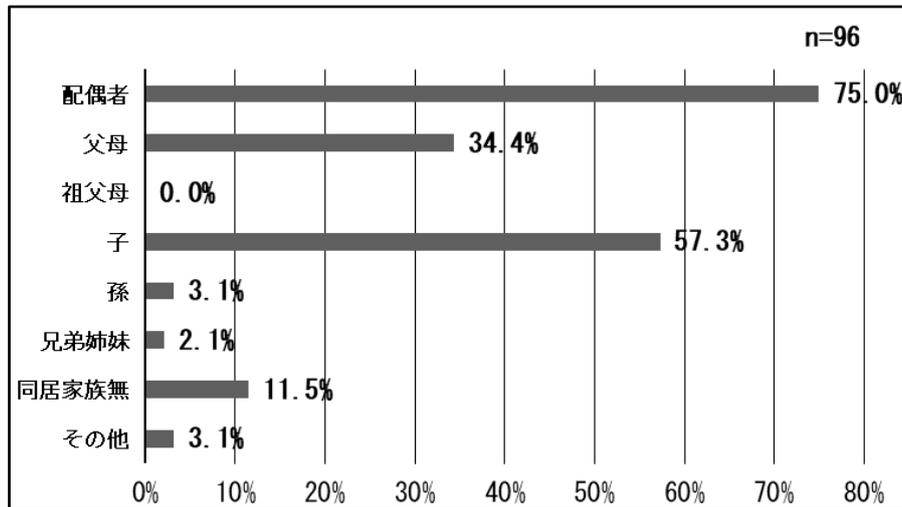
(2) 年齢



【図1—4】年齢

最も多いのは60歳代である。全体の約80%が40歳代～60歳代となっている。

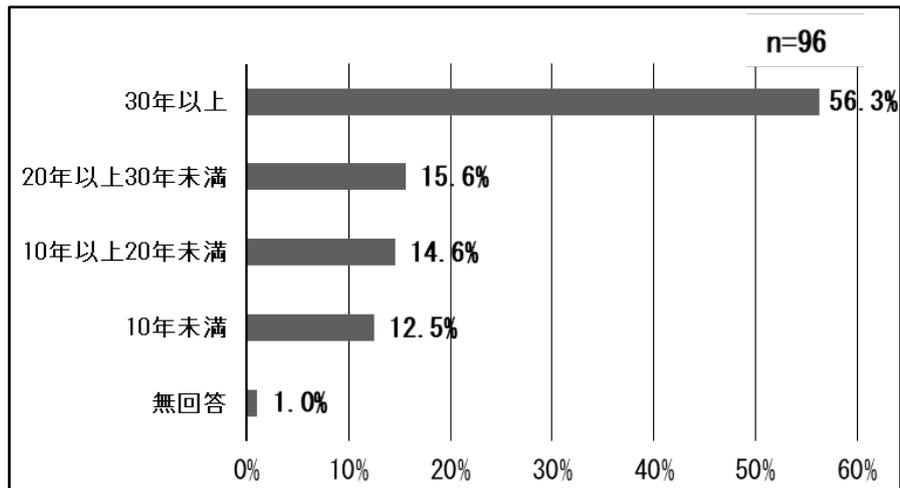
(3) 同居家族



【図1—5】同居家族（複数回答）

配偶者や子どもとの同居が目立つ。親との同居も約34%とやや多い。

(4) 居住年数



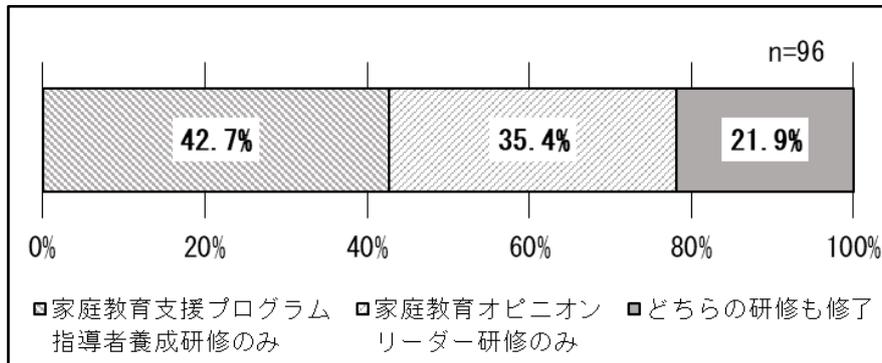
【図 1—6】 居住年数

現在の住所に何年居住しているかを確認した。約 70%が現住所に居住して 20 年以上経過している。

3 質問紙調査の結果

(1) 研修修了後の状況について

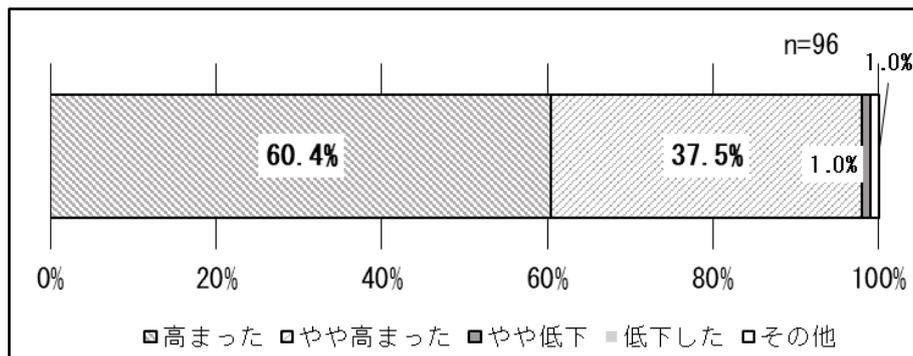
① 修了した研修の種類について



【図2—1】修了した研修

家庭教育支援プログラム指導者研修と家庭教育オピニオンリーダー研修のどちらも修了と回答した割合は、21.9%であった。

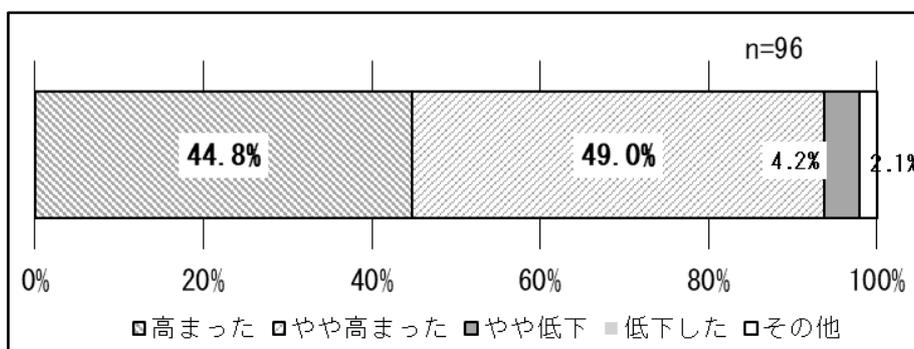
② 研修修了後の家庭教育支援への興味関心の変化について



【図2—2】家庭教育支援への興味関心

「低下した」の回答は0%であった。「高まった」「やや高まった」を合わせると97.9%となる。

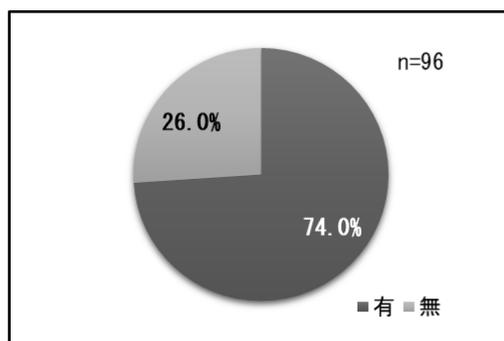
③ 研修修了後の家庭教育支援の活動への参加意欲について



【図2—3】活動への参加意欲

「低下した」の回答は0%であった。「高まった」「やや高まった」を合わせると93.8%となる。

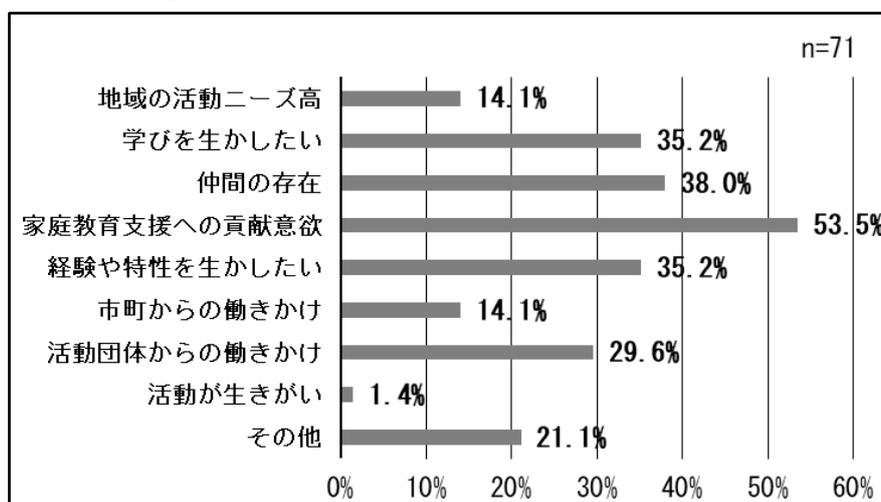
④ 研修修了後の家庭教育支援に関する活動の有無について



【図 2—4】活動の有無

全回答者 96 名のうち、71 名が「活動している」と回答した (74.0%)。残りの 25 名 (26.0%) は活動していなかった。

⑤ ④で「行っている」と回答した人が、活動に参加した主な理由



【図 2—5】活動参加理由 (複数回答：3つまで)

「家庭教育支援へ貢献したい」、「共に活動する仲間が存在があった」、「研修での学びを生かしたい」、「自分の経験や特性を生かしたい」といった回答が目立った。また、「活動団体からの働きかけ」と「市町からの働きかけ」も、一定数選択された。「その他」の内容としては、『職務 (市町職員で家庭教育支援担当であるため)』、『地域に貢献したい』、『地域の学校環境などに興味があり知りたかったから』等の記述があった。

⑥ 行っている（いた）活動の概要や特徴（記述の内容を要約 カッコ内は回答数）

7 家庭教育支援プログラム指導者研修のみの修了者

- ・市内小中学校、保育園、認定こども園等の家庭教育学級の企画運営（8）
- ・小学校での家庭教育学級への参加、保護者の話し合いのきっかけ作り（子育て等についての話し合い、広域の活動団体が実施する研修会/交流会への参加）
- ・家庭教育学級の講師
- ・就学時検診時の親学習プログラム実施、運営等の活動（15）
- ・居住する自治体の活動団体で、子育て講座等を実施し、保護者を対象とした子育ての不安解消の支援
- ・青少年育成活動
- ・地区内小中学校で家庭教育支援事業としてPTA等と共に各種講座（物作り・視察研修等）（2）
- ・市のイベント時の、家庭教育支援事業のPR（家庭教育オピニオンリーダーの紹介等）
- ・就学前の親子向け講座（小学校入学を控えた子どもたちへの学習支援及び生活体験）や、乳幼児から小学2年生対象の絵画展（2）
- ・家庭教育支援に関する冊子の作成
- ・市の乳幼児教室で活動のサポート・託児

1 家庭教育オピニオンリーダー研修のみの修了者

- ・家庭教育学級の運営支援、親学習プログラム・カウンセリング講座の運営
- ・支部*²におけるスキルアップ研修会、親子で楽しめる企画、託児ボランティア
- ・社会福祉協議会が主催している未就園児親子の集いにボランティアとして参加
- ・居住する市町のイベントで、活動内容アピール
- ・高齢者施設での手芸・折り紙教室
- ・七夕飾りづくり
- ・地域の子育てサロンで利用者とおしゃべり、親子で製作、手遊び等
- ・子育て広場の参加者と七夕まつり、ミニ運動会
- ・町内3か所の学童保育にて夏休み中に「ハンドタオルで作るくまさん」制作
- ・就学前の親子対象で梨狩り体験
- ・「お昼寝アート」（乳幼児や家族の記念写真撮影スポットの制作や準備・運営）
- ・小学校にて月1回の読み聞かせボランティア活動
- ・学校支援ボランティアの会を設立し、地域のボランティアと共に学校の要望に合わせて週1～3回授業の補助を行う活動
- ・居住自治体の学校運営協議会に参加、「まちづくり委員会」の協議への参加
- ・市の子育て支援施設にて、ひな祭りや七夕まつり等、昔遊びを親子に伝える活動に参加
- ・居住自治体の図書館にて親子で学ぶイベント（小型コンピュータを用いたプログラミング、SDGsに係る学習体験として太陽光発電の仕組み）
- ・支部*²活動として小学校での読み聞かせ
- ・NPO法人で、演劇鑑賞や遊び（段ボールキャンプ・忍者遊び・高学年キャンプ）などの体験活

動を通した親と子の成長を見守る活動

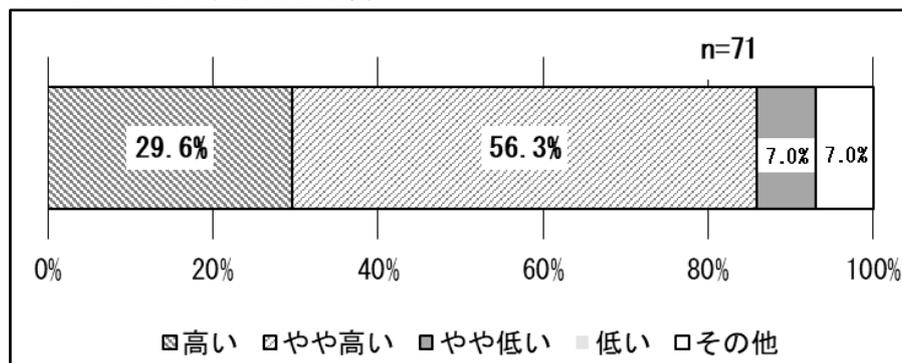
- ・ 小学校や子育て支援センターにおいて、レクリエーション活動・食育のための料理教室・親子コンサート
 - ・ 親子で楽しむふれあい交流（七夕まつり）
 - ・ 支部*²の研修会参加（「絵本の読み聞かせの基本」他）
 - ・ 小学校1年生の親限定の子育てオンライン座談会（おしゃべり）
- ※入会しただけで、ほぼ活動できていない修了者もいる。コロナ禍の影響で通常の活動が困難な様子が伺える。

ウ 家庭教育支援プログラム指導者研修及び家庭教育オピニオンリーダー研修の修了者

- ・ 子ども食堂
- ・ 親学習プログラム等のイベントの調整・協力、親子サークルの運営
- ・ 親子がふれあいながらの学習
- ・ 就学時健康診断の際に行う親学習プログラム（6）、家庭教育講演会
- ・ 公民館で親子を対象とした講座の企画、開催（3）
- ・ 中学校出前講座（目的は思春期の子どもについての悩み・不安の共有、保護者同士のコミュニケーションを深めること）
- ・ 園児等へのイベントの企画、託児
- ・ 公民館を拠点にベビーマッサージ教室、防災教室、リースづくり教室等の活動

*² 栃木県家庭教育オピニオンリーダー連合会の支部のこと

⑦ 行っている（いた）活動の満足度

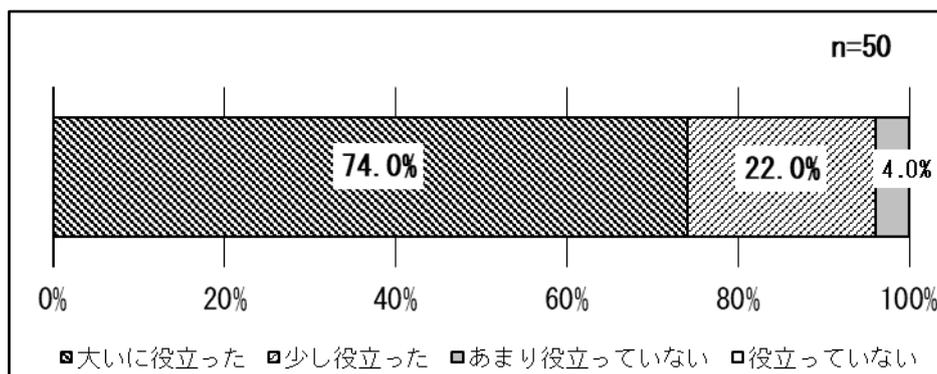


【図2—6】活動の満足度

「低い」の回答は0%であった。「高い」「やや高い」を合わせると85.9%となる。なお、「その他」の内容は、「評価なし（団体に所属はしたが、実際の活動には一度も参加できていないため、評価ができない）」であった。

(2) 家庭教育支援プログラム指導者研修内容の活用状況について

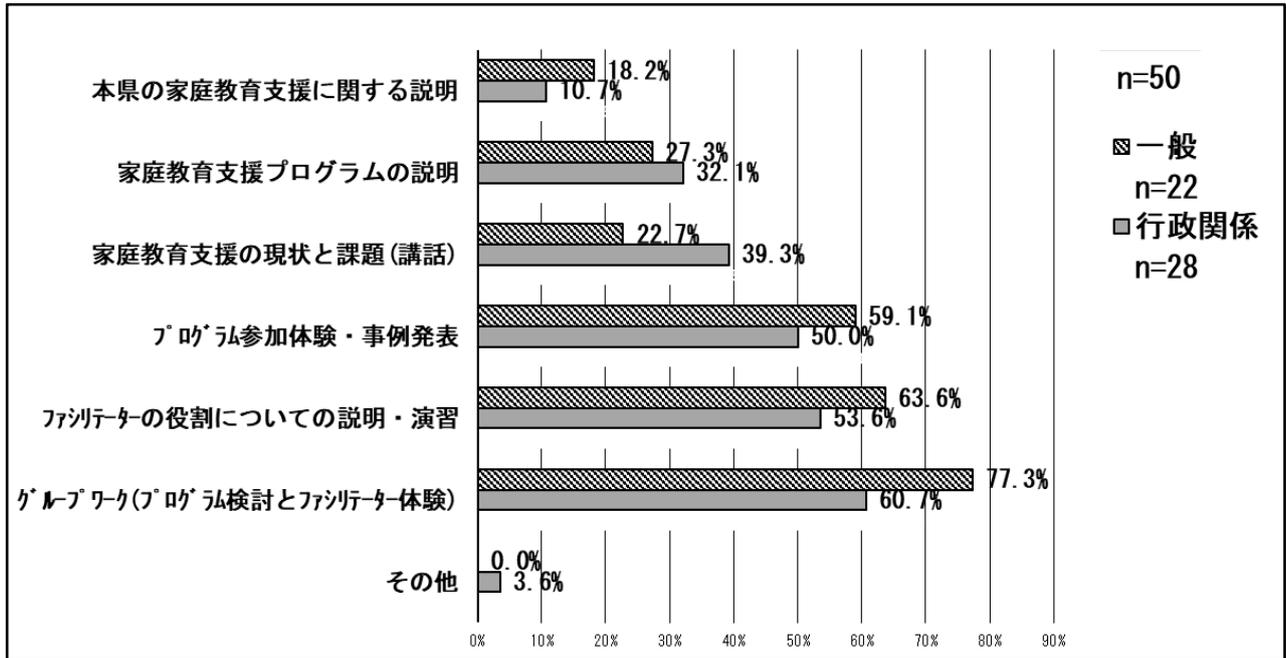
① 家庭教育支援に関する活動に取り組む際、研修で学んだ内容が役立ったかについて



【図3—1】家庭教育支援プログラム指導者研修 学んだ内容が活動に役立ったか

「役立っていない」の回答は0%であった。「大いに役立った」「役立った」を合わせると、家庭教育支援の活動に取り組む家庭教育支援プログラム指導者研修修了者の96.0%は、どちらかといえば研修内容が活動に役立ったと回答した。

② 実際の活動に役立った研修内容について



【図3—2】家庭教育支援プログラム指導者研修 役立った研修内容（複数回答：3つまで）

本研修受講者は、「一般」と「行政関係」の2つの属性に大別されるため、回答の様子を属性ごとに分けてまとめた。

「家庭教育支援プログラムの説明」「家庭教育支援の現状と課題についての講話」は、行政関係者が役立った研修内容として回答する割合が高かったが、それ以外については一般の方が「役立った」と回答する割合が高かった。また、「グループワーク」「ファシリテーターの役割についての説明・演習」「家庭教育支援プログラム参加体験・事例発表」が役立った研修内容として選択される割合は、どちらの属性においても比較的高く、50%を越えていた。

なお、「その他」の内容は、「研修に参加した方々とのつながり」であった。

③ ②で選択した研修内容で、特に役立ったものと、実際のどんな場面で役立ったかについて

ア「本県の家庭教育支援施策」について、県生涯学習課からの説明

- ・本県の実態を知ることができて良かった。

イ「家庭教育支援の現状と課題・方策」について、大学職員による講話

- ・自分たちで企画する子育て講演会の講師を、同じ先生に依頼した。
- ・子育て中の方はどんな悩みを抱えているのか、その悩みが生じてしまった背景、どんな支援ができるのかを学ぶことができ、事業のテーマを考える際や学校からの相談対応に役立った。

ウ「ファシリテーターの役割」について、教育事務所職員による説明・演習

- ・プログラム実施の際に保護者の緊張をほぐし和やかな雰囲気での話し合いを進行できた。
- ・アイスブレイクや時間の配分など、親学習プログラムの進行を学ぶことができた。
- ・プログラム作りやファシリテーターとしての心構えを講座前に確認する際役立った。
- ・コミュニケーションの大切さと難しさを改めて学ぶことができた。

- ・相手に伝わるような言い方や表現を心がけて担当する講座の時に生かしていきたい。
- ・実際にプログラムを行う上で、ファシリテーターとしての心構えや言葉の選び方に役立った。

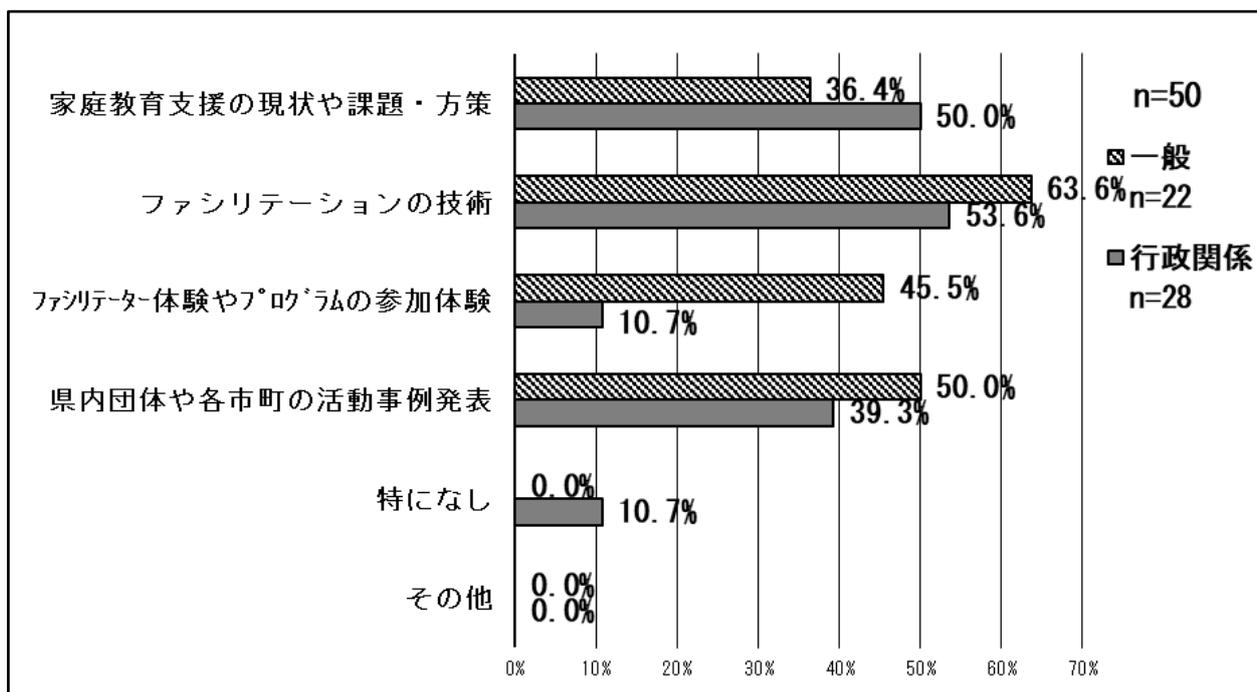
エ グループごとに行うプログラムの検討・準備と、ファシリテーター体験

- ・体験をしたことによって具体の動きを実感でき、本番で自信を持って実践できた。
- ・実際にプログラムを実施する際のシミュレーションができた。
- ・グループワークは県内の活動者との意見交換もでき有意義だった。
- ・就学時健診のプログラム実施の際に役割分担をして行うことができ大変役立った。
- ・プログラムを実際に行ってみることで成果と課題が明らかになった。その学びを自信が企画運営する研修や会議に取り入れている。
- ・グループで演習を行うことで、どうしたら参加者が話しやすいか、気づきにつながるか等を学ぶことができた。

オ その他、研修全体を通して

- ・オピニオンリーダー会の方が家庭教育学級の講師を務める際に事前の打合せ等で一緒に内容を考えたり、ファシリテーターとしての役割を考えたりする際に役立っている。
- ・地域で家庭教育支援の活動を行っている方を対象にした研修を開催した際に研修で得た知識・体験が役立った。
- ・家庭教育支援の意義と現状、実施についてがつながり、現在の仕事に生かせていると感じる。
- ・支援チームの皆さんにコロナ対策を提案する際に、プログラムの意義がどこにあるかを見落とさないようにすることや、子育て中の保護者向けの情報誌作成の際に、保護者の立場を想像する材料として役立った。

④ 研修を通して、もっと詳しく学びたかったことについて

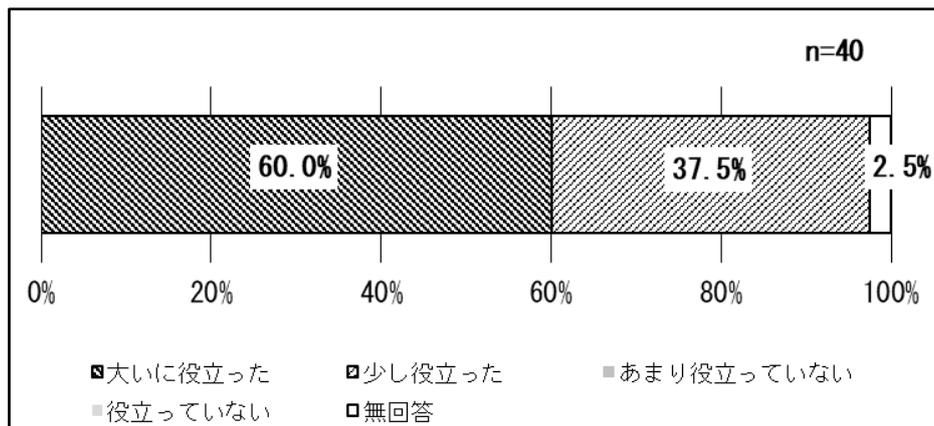


【図3—3】家庭教育支援プログラム指導者研修 もっと詳しく学びたかったこと（複数回答：2つまで）

「ファシリテーションの技術」「県内の団体や各市町の活動事例」は、どちらの属性においても更に学びたかった内容として選択される割合が高かった。また、「家庭教育支援の現状や課題・方策」は行政関係者が、「ファシリテーター体験やプログラムの参加体験」は一般の方が、それぞれ更に学びたかったと回答する割合が高かった。

(3) 家庭教育オピニオンリーダー研修内容の活用状況について

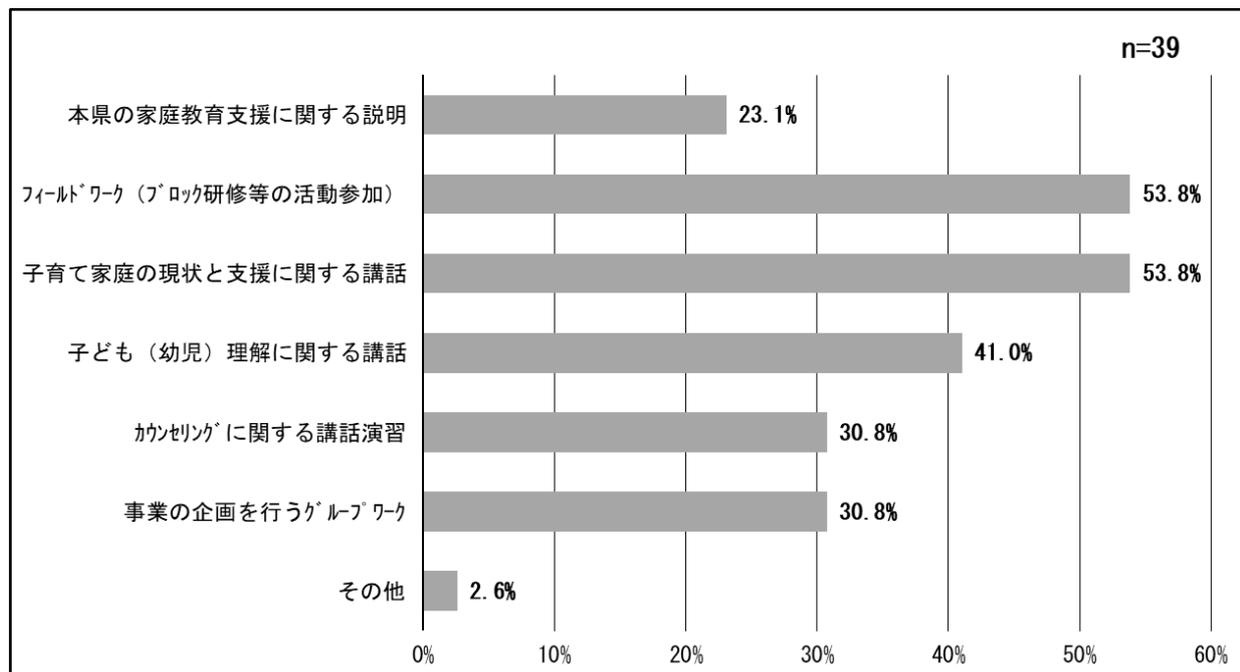
① 家庭教育支援に関する活動に取り組む際、研修で学んだ内容が役立ったかについて



【図4—1】家庭教育支援オピニオンリーダー研修 学んだ内容が活動に役立ったか

「あまり役立っていない」「役に立っていない」の回答は0%であった。「大いに役立った」「役立った」を合わせると、家庭教育支援の活動に取り組む家庭教育オピニオンリーダー研修修了者の97.5%は、どちらかといえば研修内容が活動に役立ったと回答した。

② 実際の活動に役立った研修内容について



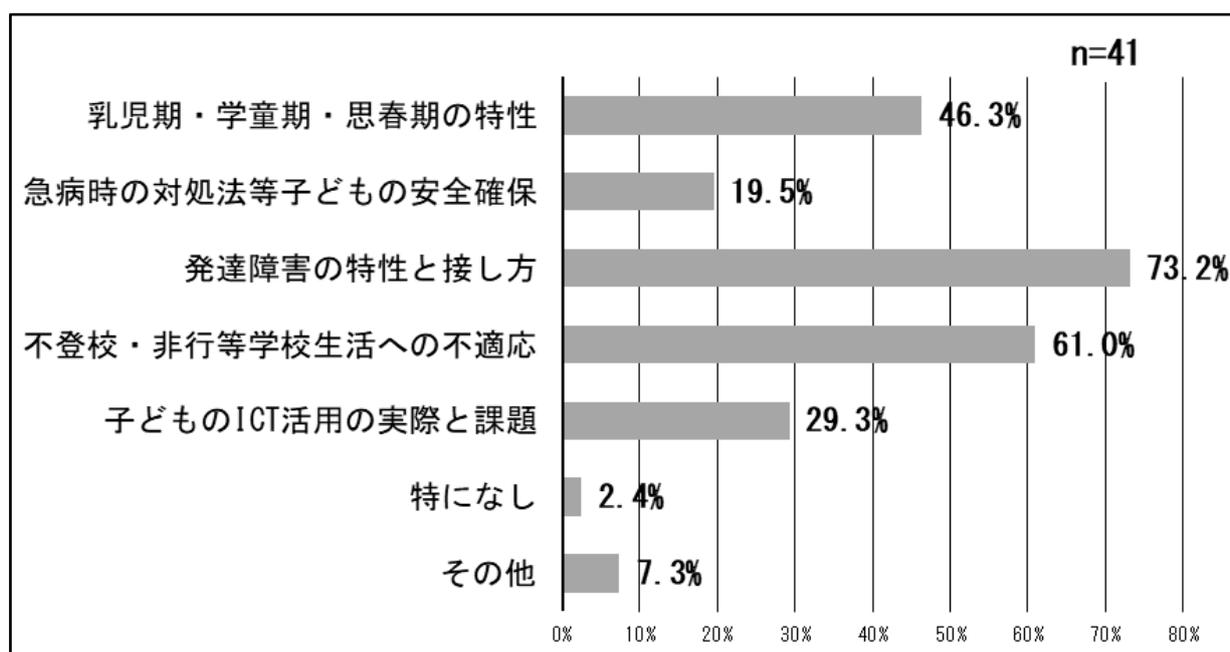
【図4—2】家庭教育支援オピニオンリーダー研修 役立った研修内容（複数回答：3つまで）

「フィールドワーク」と「子育て家庭の現状と支援に関する講話」は、50%以上の修了者から役立った研修内容として回答された。それ以外の研修内容については、役立ったものとして極端に回答数の少ない研修はなかった。

なお、「その他」の内容は、「先輩オピニオンリーダーからの助言」であった。

- ③ ②で選択した研修内容で、特に役立ったものと、実際のどんな場面で役立ったかについて
- ア「本県の家庭教育支援と家庭教育オピニオンリーダーの活動」について、県生涯学習課からの説明
- ・県で示す活動ポリシーと先輩方の経験と実施状況を学ぶことができたので、自身の活動において大変助かった。
- イ 栃木県家庭教育オピニオンリーダー連合会ブロック研修会へ参加するフィールドワーク
- ・家庭教育オピニオンリーダーの活動について具体的に知ることができ参考になった。(同2)
 - ・先輩方と一緒に活動に参加できて、仲間の存在を実感できた。
 - ・実際に活動している方の経験談はとても役立った。
- ウ「子育て家庭の現状とその支援」について、大学職員による講話
- ・社会全体が抱える問題を把握し、家庭教育支援の大切さを感じることができた。
- エ「遊びの中で学ぶ幼児」について、総合教育センター幼児教育部による講話・演習
- ・親子での活動を考える際、親・子どもの両方の立場から考えることができる。
 - ・子どもとの接し方を具体的に学ぶことができ、実際に子どもたちと接するときにとっても役立った。
 - ・子どもが遊ぶことが必要である、と大人に理解し考えてもらうための理由が講師の話の中にたくさんあり、子どもたちが遊んでいる間に見守っている親や大人に対して、子どもが遊びから体験して学ぶ必要性を話すことができた。
- オ「カウンセリングマインドと相互理解」について、総合教育センター教育相談部による講話・演習
- ・子育て中の保護者の方の話を聴いていると、アドバイスの言葉が出てきそうになるが、まずは話をじっくり聞くことの大切さを感じる人が多い。相手の話をじっくり聴き、そうだよね、たいへんだよね、と受け止めながら会話を進めていくことの大切さを痛感している。(2)
 - ・カウンセリングマインドは、人と接する上で役に立った。話を聞き、受け止めることは、対人関係をうまく築くのに大切だと思った。(2)
 - ・カウンセリングについて、自分の居住地で更に学びを深めている。
 - ・カウンセリングの技術は、保護者の意見を傾聴する際にとっても役立った。
 - ・『傾聴は敬聴なり』の姿勢、考え方は、(オピニオンリーダーとしての)活動及びふだんの生活の中で役立っている。
 - ・気持ちのよいコミュニケーションからつながりが生まれ、信頼関係が生まれることを実感している。
- カ 家庭教育支援事業の企画とその発表を行うグループワーク
- ・短時間で仲間と発表資料を作ったのはとてもたいへんだった。誰かがリーダーをしてくれるとスムーズに作業が進むので、話し合いの場などでは積極的に発言するようにしてる。
 - ・家庭教育支援事業の企画の経験は大変良かった。実際の講座を行う際に役立った。
- キ その他、研修全体を通して
- ・今の地域にあふれる課題を知ったことで、現場で予想しながら動くことができた。
 - ・親学習プログラム実施の場において役立った。
 - ・活動の現場でお子さんやその親御さんとかかわっているときに(役立った)。

④ 研修を通して、もっと詳しく学びたかったことについて

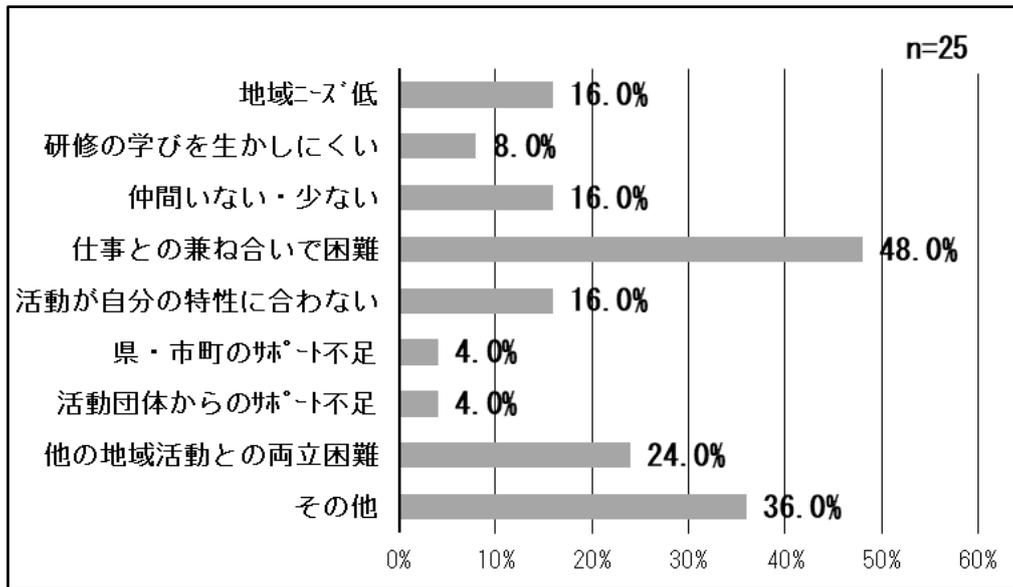


【図4—3】家庭教育支援枕'ニオリ'ダ-研修 もっと詳しく学びたかったこと（複数回答：3つまで）

「発達障害の特性と接し方」（73.2%）、「不登校・非行等学校生活への不適応」（61.0%）、「乳児期・学童期・思春期の特性」（46.3%）の順に、もっと詳しく学びたかった内容として選択される率が高かった。なお、「その他」の内容は、「保護者へのアプローチの仕方」「ヤングケアラーについて」「虐待を受けている子どもたちへのケアや支援、関連機関へのつなぎ方」であった。

(4) 研修後に活動していない修了者の状況について

① 家庭教育支援に関する活動をしない主な理由について



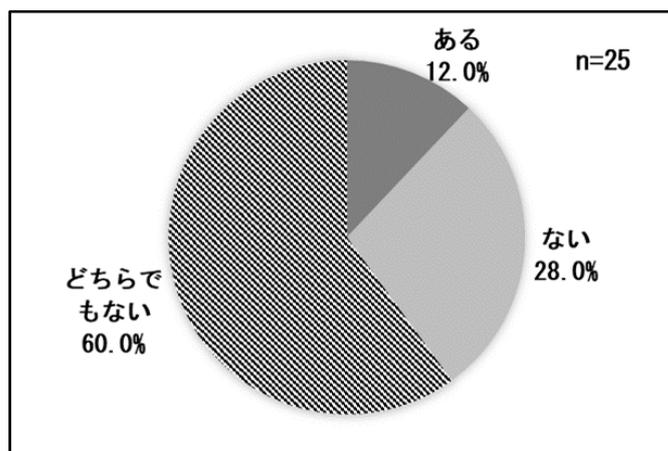
【図5—1】活動しない理由（複数回答：3つまで）

※「その他」の主な回答

- ・健康上の理由（4）
- ・親族の介護や家事手伝いなど（2）
- ・活動の場（地域の団体等）がない。
- ・既存の団体からの誘いがあり参加したが、（今後の団体活動において）自分への期待が寄せられることに負担を感じる。

全回答者 96 名のうち、25 名が「家庭教育支援に関する活動に参加していない」と回答した。その理由については、「(修了者自身の) 仕事との両立が難しい」(48.0%)、「他の地域活動との両立が難しい」(24.0%) 等の回答が目立った。

② 今後、家庭教育支援の活動を始めようとする気持ちの有無について



【図5—2】 今後活動を始めようとする気持ちの有無

「ある」は12%と、3つの選択肢の中では最も少なかった。過半数以上は、「どちらでもない」という回答だった。

4 聞き取り調査の結果

(1) 調査対象選考の基準について

偏りなく県内各地域の取組を挙げられるよう配慮しながら、質問紙調査の記述による回答内容を基に、修了者及び修了者が所属する団体等の活動の活性化や、家庭教育支援者養成研修の見直しに向けたヒントとなりそうな活動の実践例を5つ選び、聞き取り調査を行った。具体的な選考の基準は、主としてコロナ禍に対応して実施されていることや、家庭教育支援者養成研修修了者においては比較的少数の属性となる「30歳代以下」・「男性」等の実践例であることである。

(2) 家庭教育支援プログラム指導者研修修了者への聞き取り調査結果について

① 佐野市：A氏

〈 活動の実態 〉

きっかけ及び活動の概要

- ・青年会議所での活動やP T A活動から様々な学びの必要性に気づき、家庭教育支援者の養成研修にも取り組んだ。それ以外にも、公益財団法人とちぎ未来づくり財団で主催する「ネット時代の歩き方講座」を受講し、その学びを生かしてネットモラルを学ぶ講座を市内各小中学校で多数実施している。
- ・佐野市社会教育委員 ・佐野市立小学校区の子供会会長
- ・佐野市小中学校P T A連絡協議会顧問 ・佐野市立中学校の地域コーディネーター
- ・家庭教育支援プログラムのファシリテーター（活動団体「チーム佐野」）
- ・「佐野市こどもの国」のワクワク子育て講座、マミー広場で、保護者の相談相手。

ねらい/目的/意図

- ・地域の青少年育成 ・家庭の教育力の向上（家庭教育支援）
- ・学校教育への協力（「学校は子どもだけが学ぶ場所ではない」という考え方）

想定した地域のニーズ/課題

- ・小中学生がスマホやオンラインゲームなどに気軽に親しんでいる現状があり、便利さと同時に、不特定多数の人物との接触が容易にできることによる危険性の存在や、端末の使用上の注意事項や何らかトラブルが発生したときの対応を、学校の先生方の指導に任せるのではなく、それらを与えている保護者自身が子どもを危険から守る力を身に付ける必要があること。ネットモラルについて保護者も子どもも学ぶ必要性が高まっている。
- ・保護者には子育てについての様々な不安がある。

実施までの過程

- ・「家庭教育支援プログラム指導者研修」以外に、とちぎ未来づくり財団主催「ネット時代の歩き方講座」を受講。

活動の成果と課題・モチベーション

- ・ ネットモラルを学べる講座を佐野市・足利市の小中学校で実施している。
- ・ 対象は、児童生徒、または児童生徒及びその保護者。
- ・ グループワークを取り入れ、主体的に学べるよう工夫している。
- ・ 親子で同じ内容の学習活動に取り組むことで、相互理解やふれあいの機会となっている。
- ・ ネットのトラブルを事前に回避する具体的な方法や保護者に求められる姿勢、情報機器端末との付き合い方、ネットの世界の危険性などについて、子どもも保護者も主体的に考え、認識を深める機会となっている。
- ・ ネットモラルについての指導は家庭教育でも担うべきものと捉え、家庭での端末の使い方についてのルール作りや、子どものネット内での動向に注意を払うことの大切さなどについて、認識を深めてもらえるよう配慮している。
- ・ 研修での学びや、それをとおして形成された人間関係により、様々な刺激をもらい、活動のモチベーションを上げることにつながっている。
- ・ より子どもや保護者が主体的に楽しく学ぶことができるように、講座の実践、振り返り、課題確認、修正を繰り返していこうとしている。

〈 研修での学びと活動との結びつき 〉

研修内容の活用

- ・ 家庭教育支援のための保護者の相談相手を務める際はもちろん、ネットモラルについての講座実施時においても、研修で学んだ「ファシリテーション」や、「リフレーミング」等のコミュニケーションの技法を活用している。
- ・ 子育てサロンなどで子育て中の保護者から相談を受けた際に、コミュニケーションについて学んだことが生かしている。

〈 今後の活動見通し 〉

新たに考えている展開

- ・ (家庭教育支援の範ちゅうではないが) 青少年(高校生)が自己肯定感や自己有用感、達成感を持てるような取組のプロデュース。具体的には「カーボンニュートラル」に関するもので、夏の暑さが厳しい佐野市ならではの取組を思案中。

〈 提言 〉

家庭教育支援者養成研修の受講者確保や、実施上の新たな視点について

- ・ 子育て世代の受講者を増やすには、県のPTA連合会への情報提供は有効なのではないか。
- ・ 各市町で研修参加に必要な交通費の補助などがあるとよいのではないか。
- ・ 研修修了後にどのような活動につながる可能性があるか、更に情報提供を充実させるとよいのではないか。

② 那須塩原市教育委員会事務局生涯学習課

〈 活動の実態 〉

活動の概要

- ・平成 19 年度から就学時検診時に新入生保護者を対象に、生涯学習課、社会教育指導員（全 15 公民館）、家庭教育オピニオンリーダー連合会黒磯/西那須野/塩原各支部が連携しながら、「親学習プログラム」を実施してきている。

※コロナ禍の現在（R2～）は今年度まで、プログラムは実施できていない。

代わりに、家庭教育の大切さを、上記 3 者で検討し完成させたリーフレットを使い、家庭教育オピニオンリーダーさんが短時間（15 分程度）で伝えている。（資料参照）

※家庭教育の大切さを訴える資料として、子育て家庭において、常にどこかに掲示するなど目に触れやすい場所に設置できるよう、情報を精選した A4 1 枚のリーフレットを配布した。

- ・生涯学習出前講座「Let's 親学習」において、親学習プログラムを実施している。R4 は 1 校で実施。対象は主に小学校。内容は低学年児童とその保護者を対象とした、相手を大切にしたい言葉かけで互いに気持ちよく過ごすことの重要性を学ぶもの。市の生涯学習課が市内小中学校と連携して行っている。

ねらい/目的/意図

- ・保護者同士が同じテーマについて互いの考えや経験を伝え合うことによって、それらを共有すること。また、それらを通して自分の子育てを振り返り、新たな気づきを得ること等によって、家庭教育に進んで取り組もうとする意識と実践力を養うことを目的としている。

想定した地域のニーズ/課題

- ・市民対象のアンケート結果「関心の高い生涯学習の内容」によると、「家庭教育・子育て」は 30-39 歳でその割合が 5 割に迫っており、この世代で学びのニーズが高いことが分かる。
- ・課題として、「家庭教育・子育て」について学びたいというニーズがあるにもかかわらず、「育児や家事、仕事で忙しく学ぶ時間がとれない」ことや「学ぶきっかけがない」こと。また、核家族化が進んだことや、コロナ禍で交流が減ったこと等により、保護者の孤立化が進み、子育ての悩みを抱え込んでいる保護者が増えていること。悩みを気軽に相談できる場が少ないことや、相談窓口の情報が届いていないことがあげられる。

実施までの過程

- ・家庭教育オピニオンリーダー支部長会議（黒磯・西那須野・塩原の 3 支部。年 3 回）
- ・社会教育指導員会議（市内 15 館。年 5 回中 2 回が親プロ準備）
- ・社会教育指導員/家庭教育オピニオンリーダー合同会議（＋生涯学習課）
- ・資料の作成、見直し

活動の成果と課題・モチベーション

- ・コロナ禍においても、どのように実施すれば少しでも家庭教育の大切さを伝えることができ

- るのかを、上記の連携をキープしたまま模索しながら活動を継続することができている。
- ・コロナ禍においても、子育てについて気軽に相談できる方が地域にいるということを知ることができている。

〈 研修での学びと活動との結びつき 〉

研修内容の活用

- ・家庭教育以外にも、PTA 会長の研修会や地域学校協働活動推進員の研修会等で、アイスブレイクを取り入れている。実施することで雰囲気や和み、参加者の参加意欲及び発言意欲の向上を図ることができている。
- ・アイスブレイク/ワーク/振り返りというプログラムの流れに沿って、他の研修でもプログラムを構成し実施している。

〈 今後の活動見通し 〉

改善策

- ・コロナ禍の就学時健診では、親プロは実施できていない。行っているのは、家庭教育の重要性を伝える資料説明や社会教育指導員、家庭教育オピニオンリーダーさんらの紹介。少しでも保護者が参加型で実施できるような工夫を試みたい。

新たに考えている展開

- ・学校の授業参観時や、学年部会行事等で生涯学習出前授業「Let's 親学習」を利用してもらえるよう啓発を図る。

〈 提言 〉

家庭教育支援施策に取り組む関係者に向けて

- ・教育の原点を学ぶことができる。他市町の家庭教育に意欲的に取り組んでおられる方々とながりをもちつづけることができる。一歩踏み出すことで新しい発見や出会いがあり、かけがえのない財産になると思う。

家庭教育が充実することの効果について

- ・家庭教育は全ての教育の出発点であり、教育の原点である。土台（基礎）がしっかりしていなければ、頑丈で安定した建物が建てられないのと同様に、家庭教育の定着無しに学校教育、社会教育は充実しないと改めて感じている。学校現場で指導すべき事柄が年々増えていくにつれ、本来教員が指導すべき事柄との境界線がぼやけてしまっているように感じられる。家庭教育の充実、学校現場の働き方改革にもつながるのではないかと。

(3) 家庭教育オピニオンリーダー研修修了者への聞き取り調査結果について

① 小山市：B氏

〈 活動の実態 〉

活動の概要

- ・小山市立中央図書館の「講演会・としょかんこども会等事業」の一つとして、夏休み親子で楽しむプログラミング講座（1回/子供対象だが、必ず保護者同伴）を実施した。
- ・同様に、令和3年8月には、夏休みソーラーパワーを親子で体験しよう！（1日2回/親子対象）を実施した。

ねらい/目的/意図

- ・自身のスキルや経営する会社の特性（プログラミングの学習に使うことのできる機械を入手できる）を生かして、将来の技術者を育成する。
- ・経営する会社の社会貢献活動としての側面もある。
- ・子どもたちが将来「職業人」として自立するための一助となるような活動としたい。

想定した地域のニーズ/課題

- ・学校教育に「プログラミング」に関する学習が導入され始めていることについての認識があったため、それについての子どもやその保護者の興味関心、学習意欲が高いと予想していた。

実施までの過程

- ・研修修了後、1年ほどは小山市内の栃木県家庭教育オピニオンリーダー連合会の支部活動に参加していた。
- ・上記の活動が、自身が思い描く活動（自身のスキルや経営する会社の特徴を生かしたもの）とは関連が薄かったため、独自に活動を考える。
- ・小山市立中央図書館内の「地域の企業紹介コーナー」が、自身の経営する会社を取り上げていたことを足掛かりとし、前述の図書館事業に講座を提供する。

活動の成果と課題・モチベーション

- ・2つの実施講座に参加した方々の反応の良さに、手応えを感じている。どちらについても参加者に楽しく学んでもらうことができた。

〈 研修での学びと活動との結びつき 〉

研修内容の活用

- ・研修全般を通して家庭教育の重要性に気付いたことが、現在の活動につながっている。
- ・講座運営にあたっては、声掛けの仕方など子どもへの接し方を考える際に、子どもの発達について理解を深めるための講話での学びが有効だった。

〈 今後の活動見通し 〉

改善策及び新たに考えている展開

- ・ これまでに実施してきた講座において、家庭教育支援的な側面にもう少し力を入れていくこと。具体的には、親子で触れ合いながら体験活動を行ったり、親子が協力して考える必要がある学習課題を提供したりすること。

〈 提言 〉

今後何らか新たな活動の展開を考えている方々に向けて

- ・ 自分の思いや考えを形にするためには、行動するしかない。

② 芳賀町：C氏

〈 活動の実態 〉

活動の概要

- ・ 栃木県家庭教育オピニオンリーダー連合会芳賀支部において、H30 年度の家庭教育オピニオンリーダー研修の「フィールドワーク」から活動に参加。主に年 3 種類の活動を行っている。内容は、夏休みの学童保育利用児童や町内在住在勤の就学前のお子さんとその保護者を対象としたもの。

具体的には、以下の 3 つの活動である（資料参照）

- ①学童保育夏休み出前講座（「くまのハンドタオルアート」）
- ②はがまるくんと一緒に「梨狩り体験」
- ③「お昼寝アート」

ねらい/目的/意図

- ・ 参加児童やその保護者が、楽しい時間を過ごすこと。
- ・ 地域のオピニオンリーダーが、子育てしている保護者とその子どもたちを応援していること、見守っていることの理解を促進すること。

想定した地域のニーズ/課題

- ・ 核家族化、共働き世帯の増加などにより、学校長期休業中の学童保育利用児童が増加していること。感染症対策をしながらの活動（少人数での活動）が難しくなっていること。
- ・ コロナ禍などによって孤立化した子育て世帯を、どうサポートし、見守っていくか。

実施までの過程

- ・ ①学童保育夏休み出前講座（「くまのハンドタオルアート」）
芳賀町内 3 か所の学童保育施設や、県東親育ちスマイルネット芳賀支部と連携して実施。活動日程の調整や、材料の調達、活動時の分担決定などが必要。学童保育施設には、参加者数を確認。実際の活動時は、メンバー 4~5 人で対応。3 か所で、3 日間ほぼ同じ内容の活動を実施。
- ・ ②梨狩り体験
町の生涯学習課、商工観光課、総合情報館、書籍販売店、協力梨農家等と連携して実施。コロナ前は町のバスを使い、もっと多い参加定員で実施していた。広報チラシの作成印刷配布、会場予約、芳賀町キャラクターはがまる君出演依頼、芳賀町グッズや絵本の提供準備、協力農家さんとの日程調整などが必要。親子が一緒に楽しく梨狩りに参加することでふれあいの機会となるとともに、地域の良さを知り地域への愛着を育んだり、読み聞かせの活動とのつながりで、町内のブックストアの協力により参加者に対して絵本のプレゼントも行ったたりするなど、家庭教育を支える機会となっている。
- ・ ③お昼寝アート
絵本の世界観や年中行事など季節感のある絵などの制作物を背景として、就学前のお子さん

の写真を保護者が撮影するイベント。撮影した写真を各家庭の年賀状の図柄として用いるなど、思い出作りだけでなく様々な用途も考えられる。これまでは平日に実施していたので、来場者はほぼ母と就園前の子に限られていたが、日曜開催とすることで父や就園・就学している子ども達の参加も見込とのこと。気軽に写真や動画の撮影ができ、SNSへの投稿などそれらの利用頻度が高いであろう現在の子育て世代の特徴に応じた取組だと思われる。子育て世代が多く足を運ぶ機会となる可能性があると思われ、他の活動や様々な情報周知など、地域の子育てや家庭教育支援をさらに充実させる好機ともなることが予想される。

活動の成果と課題・モチベーション

・①学童保育施設への出前講座

様々な学年の児童との触れ合いを通して、現代の子ども達の特徴や傾向を知る機会となった。課題と感じられたのは、様々な生活体験が不足している児童が増えていること（ひもや輪ゴムをうまく扱うことができない、結べない等）。

・②梨狩り体験

参加した親子同士の交流の機会となっていたし、オピニオンリーダーと参加親子の交流を図ることもできた。また、町を含むいくつかの機関や団体と協働で実施するイベントであり、地域のつながり構築にもつながっている。

〈 研修での学びと活動との結びつき 〉

研修内容の活用

- ・子ども達や、親子との接し方の基本。研修において、カウンセリング、傾聴の大切さ等を知ることができ、いろいろな活動に生かすことができている。
- ・各種イベントの企画や運営の方法

〈 今後の活動見通し 〉

改善策

- ・より参加者の声を取り入れたイベントの企画を試みたいと考えている。

新たに考えている展開

- ・参加者の声を生かしたイベント企画のために、参加者を対象としたアンケート調査を実施したい。またその際は、ICTを活用したアンケート調査を行いたい（実施したか要確認）。

〈 提言 〉

家庭教育支援施策に取り組む関係者に向けて

- ・個人では困難な活動も、仲間がいれば可能になることがたくさんあると思う。
- ・生き活きと活動、活躍されている先輩方からいろいろなことを学ぶことができる。

③ 大田原市：D氏

〈 活動の実態 〉

活動の概要

- ・放課後デイサービス施設において、児童を対象とした読み聞かせを実施。
- ・病院が運営する高齢者施設において、高齢者を対象とした読み聞かせを実施。
- ・栃木県家庭教育オピニオンリーダー連合会の大田原支部定例会への参加。
- ・近隣の支部とつながり、情報交換を行っている。他支部との協力によりできることを模索している。

ねらい/目的/意図

- ・(個人として) 家庭教育や子育てに関する様々な知識を習得すること。
- ・地域の中で悩みや困難を抱えて孤立する保護者の不安や負担感を緩和すること。

想定した地域のニーズ/課題

- ・貧困
- ・子育てと仕事の両立困難
- ・夫婦どちらかまたはひとり親家庭が家事・育児をひとりで担う、いわゆる「ワンオペ」育児による負担感
- ・保護者同士がつながる機会の減少
- ・就学前の子の保護者の、子育て経験の少なさに由来する悩みや不安

実施までの過程

- ・令和3年度に家庭教育オピニオンリーダー研修修了。その後、居住地域にある支部の活動に参加している。

活動の成果と課題・モチベーション

- ・地域の課題にあった家庭教育支援の取組ができていないかについては手ごたえを感じていない。モチベーションはあるが、活動参加からまだ日が浅く、団体内での人間関係づくり、メンバーとの相互理解があまり進んでいない。地域のニーズに関する理解も進んでいるとは言えない。加えて、コロナ禍で通常の支部活動が行えていないこともあり、満足できる活動には至っていない。

〈 研修での学びと活動との結びつき 〉

研修内容の活用

- ・家庭教育に関する現代的な課題について学んだことを生かし、自身が居住する地域において子育て家庭が抱える不安や悩み、課題を想定している。

〈 今後の活動見通し 〉

改善策や、新たに考えている活動展開

- 支部のメンバーとの相互理解に努めること。特に、強みについて理解すること。
- 行政とのつながりを生かした、地域の子育て家庭が抱える課題や、家庭教育支援に関するニーズを把握するためのアンケート調査の実施。
- 近隣の他支部との情報交換やつながりを密にして互いに学び合うことや、共同で家庭教育支援に関わる何らかの事業・イベントを実施して、支部のメンバー同士や、支部と地域の保護者、そして地域の保護者同士といった、人々の「つながり」を生み出すこと。
- 上記のような取組をとおして、家庭教育オピニオンリーダーの認知度を向上させること。
- 将来的に、各地域のオピニオンリーダー間につながり作りや学び合いの促進を目的とした取組を開催できるとよいのではないか。